

堺は古くは住吉大社領であり、宝永元年(1704)の大和川の付け替えにより地続きでなくなって以降も、現在も「堺の住吉さん」と呼ばれているように、堺のまちとの深い関係を有している。

住吉大社の夏祭りは7月の海の日に行われる「神輿洗神事」で神輿を洗い清める神事を始まりとし、7月31日に「夏越祓神事」、8月1日に「神輿渡御祭」通称「おわたり」が行われる。神輿は紀州街道を大阪市側の安立町から大和川を渡り、大和川で大阪衆から堺衆への「ひきわたし」が行われ、堺市の御旅所である宿院頓宮まで練り歩く。「夏越えの祓え」とも呼ぶように、江戸時代までは6月の晦日の日であったが、明治13年(1880)から8月1日に変更となった。一時期は神輿が自動車で運ばれていたが、平成17年(2005)からは45年ぶりに大和川を歩いて渡る「おわたり」が復活し、年々盛大に行われている。平成23年(2011)には、出島の漁師達が豊漁祈願して行っていた「鯨祭り」が57年ぶりに復活し、巨大なクジラの山車が製作され、住吉大社へ奉納された後、お渡りと合わせて巡行された。

堺への「おわたり」がいつごろから始まったのかは定かではないが、和泉国南荘の氏神である開口神社近くにあった海会寺住職の日記『蔗軒日録』の文明16年(1484)6月29日の条には「住吉大明神…、午後馬騎百人ばかり、神輿を送り、宿井の松原に至る」と記されている。イエズス会宣教師フロイスによる永禄5年(1562)の記事でも「住吉社は堺の郊外約半里のところ、市の人々の行楽地となっている広野にあり、堺のまちに神輿が来ていた」とみられる。江戸時代初期に制作された「住吉祭礼図屏風」(堺市指定有形文化財)などからもその神輿の盛大な様子をうかがうことができる。与謝野晶子は大正4年(1915)の『私の生ひ立ち』の中で、子どものころに生家で見聞きした「住吉祭」や、その前夜におこなわれた「大魚夜市」の様子も記している。

その「大魚夜市」は、7月31日に大浜公園で開かれ大勢の人々でにぎわう。「大魚夜市」の起源は鎌倉時代に作られた魚座といわれ、住吉大社は、海や漁業の神様として堺の漁民から信仰され「住吉祭」に合わせ、毎年この日に行われる。古来より堺では漁業が盛んで、江戸時代には桜鯛が堺一の名物ともいわれていた。



摂河両国水図



神輿渡御祭「おわたり」



神輿巡行の様子(桜之町東周辺)



くじら祭り



宿院頓宮

堺南北荘の堺の人々にとって、夏祭りは南北一緒の住吉祭であり、それからほぼ1ヶ月後の秋祭りは、北荘の氏神である菅原神社、南荘は開口神社でそれぞれ八朔祭が今も行われている。

菅原神社の創建は長徳3年(997)に天神社を創建したことを始まりとし、境内には延宝5年(1677)に鉄砲鍛冶榎並屋勘左衛門の寄進によって建てられた楼門(大阪府指定有形文化財)が残る。

開口神社は延喜式内社で、奈良時代には開口水門姫神社と称しており、最古の国道と言われる竹之内街道の西端にあって大阪湾の出入口を守る神社で、神功皇后勅願によって建立されたと伝えられている。開口神社での八朔祭の運営の様子は、『蔗軒日録』文明16年(1484)8月1日の条に「総社三村祀祭礼、会合衆内、カエス、イツミ屋二人、其の頭を司る」と記され、中世の自由都市堺を自治的に運営した商人集団である会合衆が八朔祭の運営責任者を務めていたことがわかる。

江戸時代中頃からは地車や鉾も出されるようになり、昭和の初めころまで出されていた鉾が、大小路鉾といわれるものである。地車は、明治29年(1896)の住吉祭りでの湊村(船待神社)の舟地車と北組(菅原神社)の地車による殺傷事件で地車が警察から禁止され、その後明治39年(1906)になってやっと練物が許可され、明治40年(1907)に地車に代わってふとん太鼓により奉納が行われるようになり、現在も祭りを彩る。

環濠内ではこのほかにも様々な祭礼が行われているが、住吉祭や八朔祭は、歴史的にも記録が比較的良好に残っている。これらの祭りは「元和の町割り」を引き継ぐ市街地を舞台として展開するものであり、祭礼を通じて地域に根付く伝統を感じることができ、海とともに歩んできた堺の人々の信仰の象徴のひとつといえる。



現在の大魚夜市



大魚夜市夜之景
(堺名所案内明治28年(1895))



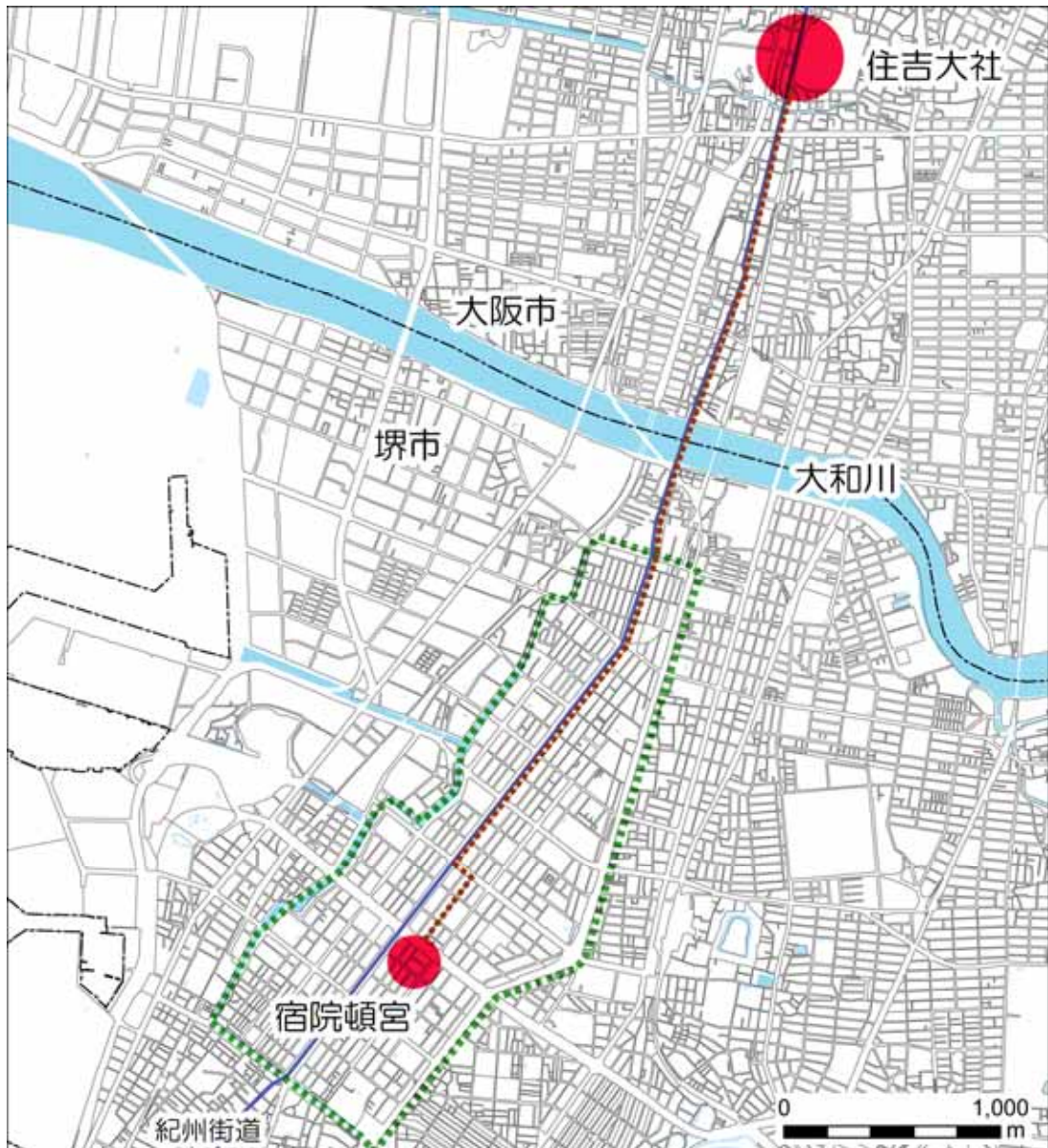
現在のふとん太鼓の様子



現在の八朔祭の様子



住吉祭礼図屏風 右隻(6曲1双のうち)



住吉祭における神輿渡御祭（お渡り）巡行ルート

茶の湯にみる歴史的風致

応仁の乱以来、貿易で急成長を遂げた堺の経済力は、京や奈良をもしのぐほどに発展した。この経済力を背景に、堺商人の間では、連歌などさまざまな文芸が花開く。茶の湯についても、北向道陳、武野紹鷗、千利休、今井宗久、津田宗及、山上宗二など多くの茶人を輩出し、茶の湯における作法や道具使いなどにおいて大きな変革が行われた。

武野紹鷗(1502～1555)は、茶室を四畳半に相応する草庵茶湯の規矩をつくりあげた。このころ、茶会の構成や手前の成立がみられ、茶会の様子を克明に記した茶会記が作成されている。なかでも、津田宗達、宗及親子の茶会記である『天王寺屋会記』は、天文17年(1548)から天正13年(1586)にかけて、堺、京、奈良などで行われた茶会の様子を記した貴重な史料である。



椿の井戸(伝千利休屋敷跡)

また、武野紹鷗に師事し茶の湯を学んだ千利休(1522～1591)は、茶室を一畳台目や二畳のような小間に移行し、座敷の飾りを簡素化するなど、外見は質素であっても内面の充実を求める「わび茶」を完成させた。

16世紀における、堺の都市事情や当時の茶の湯の様子については、17世紀前半に宣教師のジョアン・ロドリゲスにより編纂された『日本教会史』のなかで、詳細に述べられている。

「数寄と呼ばれるこの新しい茶の湯の様式は、有名で富裕な堺の都市にはじまった。(中略)その都市で資産を有している者は、大がかりに茶の湯に傾倒していた。また、日本国中ではもとより、さらに国外にまで及んでいた商取引によって、東山殿のものは別として、その都市には茶の湯の最高の道具があった。また、この地にあった茶の湯が市民の間で引き続いて行われていたので、そこにはこの芸道に最も優れた人々がでた。その人たちは、茶の湯のあまり重要でない点をいくらか改めて、現在行われている数寄を整備していった。たとえば、場所が狭いためにやむを得ず当初のものよりは小さい形の小家を造るようになったが、(中略)

このような地所の狭さから、茶の湯にふけていた人のすべてが東山殿の残した形式で茶の湯の家をつくることはできないという事態が生じていた。そしてまた、その他の事情が起きて、茶の湯に精通した堺のある人たちは、幾本かの小さな樹木をわざわざ植えて、それに囲まれた前よりも小さい別の形で茶の家をつくった。そこでは、狭い地所の許す限り、田園にある一軒屋の様式をあらわすか、人里離れて住む隠遁者の草庵を真似るかして、自然の事象やその第一義を觀賞することに専念していた。(中略)

この都市にあるこれら狭い小屋では、互いに茶を招待しあい、そうすることによってこの都市がその周辺に欠いていた爽やかな隠退の場所の補いをしていた。むしろ、ある点では

彼らはこの様式が、純粋な隠退よりも勝ると考えていた。」

さらに、ロドリゲスは、堺ではこの隠退の場所を、「市中の山居」と呼んでいたと記している。当時堺においてつくられた茶室は、慶長20年(1615)の大坂夏の陣の前哨戦により、ことごとく焼け落ちている。慶長20年(1615)の被災後、幕府による復興が進められ、「元和の町割」と称する新しい都市計画が実施された。

近世の茶室は、環濠都市内外に残されており、引き続き人々の間で茶の湯がたしなまれていることを確認することができる。特に、環濠都市では中世の茶の湯を引き継ぎ、盛んに行われていた。堺区錦之町東1丁に位置する山口家住宅では、近世中期から後期に屋敷内において建築した茶室が、現在も残されている。山口家住宅は、慶長20年(1615)の焼土層の上に建築しており、江戸時代前期の建築である。近世初期の町家を知るうえで、全国的にも貴重な建物であることから、国の重要文化財に指定されている。建築当初は、大きな土間とそれに面した部屋で構成され、東側の山口筋に面し



山口家住宅茶室



山口家住宅 平面図

て門があったことが、元禄2年(1689)の「堺大絵図」から読み取ることができる。主屋は、切妻造、妻入の瓦屋根であり、東面及び南面に庇をそなえる。安永4年(1775)に主屋を改築し、南側に新しく玄関と座敷、西土蔵を建築し、さらに江戸中期から後期には奥座敷を増築し、寛政12年(1800)には北土蔵を建築するなどして、現在の間取りとなった。4畳半の茶室は、江戸時代中期から後期にかけて増築された建物内に設けられている。茶室へは、客が庭から訪れることができるように、飛び石と待合を設けている。現在は堺市立町屋歴史館として公開しており、年に数回茶会を催している。

南宗寺には、利休没後百十年目の元禄13年(1700)に高木十三郎により建立された利休の供養塔がある。ここでは、元和年間以降300年にわたり、三千家の家元の供養塔が建立されており、茶の湯にとって神聖な場所となっている。

さらに、南宗寺では利休をしのぶ法要である利休忌を行っている。明治9年(1876)に千利休とゆかりのある塩穴寺から、二畳台目、草庵風の茶室である実相庵が移されたことを契機として、1・3・5月には28日の利休忌日に、2・4・6月には19日の宗旦忌日に茶会を催し、さらに、利休正当忌の2月28日には盛大な茶会を行っていた。この実相庵は、昭和20年(1945)の空襲により焼失したが、昭和38年(1963)に茶室を再建した。現在は、2月27日に本堂において茶会と法要が行われている。

また、環濠都市には利休遺愛と伝えられる石造品が多数残されている。妙国寺の六地藏燈籠、大安寺の虹の手水鉢、時雨の井戸、南宗寺の袈裟形手水鉢などがある。堺今市町にあった利休屋敷の跡地と伝えられる場所では、弘化2年(1845)に加賀太郎兵衛が敷地内の井戸を取り込み、利休遺愛の「椿の井戸」として茶室を併設し再興した。後に所有者が変わり、辻本富三郎によって新たに「洗心洞」と名付けた茶室を建てていたが、堺空襲により焼損し、現在は井戸だけが残されている。

また、名水と伝えられている井戸が開口神社の境内に残されている。金龍井と呼ばれており、元文元年(1736)刊行の「和泉志」には、天正年間までこの地に位置していた海会寺の井戸と伝えられ、茶の湯に適した水であると書かれている。

茶の湯に用いられる器については、湊焼をあげることができる。湊焼は、明暦元年(1655)に京都楽家三代道入の弟道楽が、さらに延宝年間(1673~1681)に上田吉右衛門が湊村(現在の堺区東湊・西湊町)に移住し、作陶を行ったことが始まりとされる。現存する湊焼の作品は、江戸時代末頃以降のもので、茶碗、灰炮烙、向付などの茶道具が残されている。

茶の湯と深いつながりのある和菓子づくりは、中世に堺環濠都市で萌芽したと伝えられ、近世に発



利休供養塔



南宗寺 配置図



南宗寺 実相庵

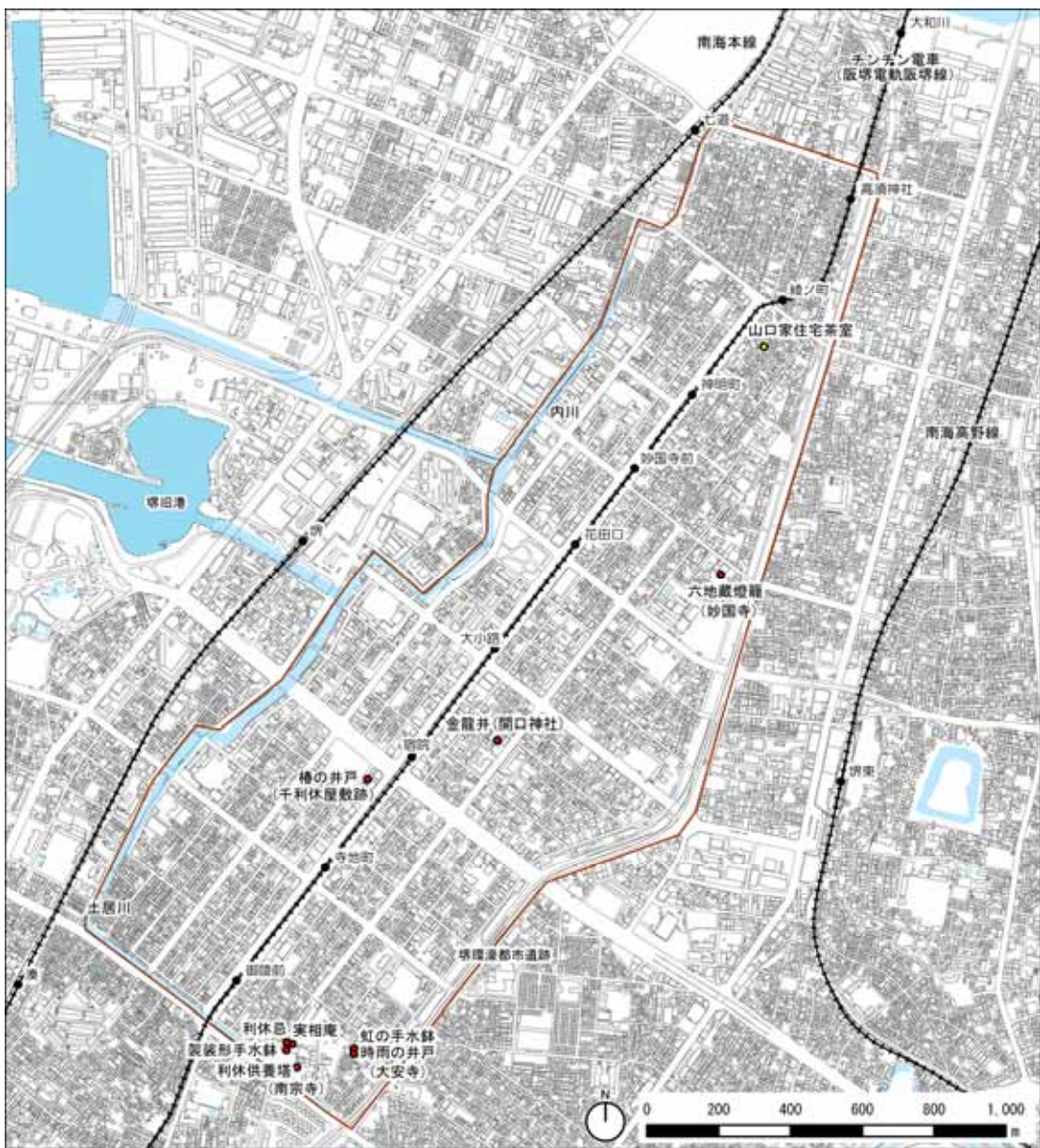


利休忌

展している。近世の堺では、元禄 8 年(1695)の「手鑑」において、菓子屋が 52 軒記録されている。現在でも、市内には茶の湯に用いる和菓子を製造する店舗がみられる。

また、現在、茶の湯の活動は環濠都市にとどまらず、市内小学校では教育のなかで茶の湯体験を進めている。さらに、山口家住宅での茶会や、10 月の堺祭りに合わせて、堺大茶会が行われている。この堺大茶会では、平成 23 年(2011)には 2 日間で、南宗寺 4,500 人、大仙公園 15,600 人ものが参加があった。

堺での茶の湯は、中世には作法や茶室を改革するなど、国内で大きな影響を与えていた。近世以降、400 年以上の歳月を経てもなお、堺において茶の湯が盛んに行われていることを、茶室や利休忌、利休の供養塔などから伺い知ることができる。このことは、千利休をはじめとする堺の茶人が、茶の湯に与えた影響がいかに大きかったかを物語っている。茶の湯が持つ礼節やもてなしの心は、今もなお堺において広く伝わり、市内外の人々が流派にとらわれることなく茶の湯の文化にふれることができる。



茶の湯に関する建造物および伝統的活動の分布